

# 国語

指示があるまで、このページをよく読んで待ちなさい。指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。

## I 受験に際しての注意

- 1 問題用紙は一ページ（表紙を除く）から十九ページまでである。
- 2 問題の内容についての質問には、いつさい応じない。それ以外のことがらについて尋ねたいことがあれば、手をあげて監督者に聞くこと。
- 3 監督者の「はじめ」の合図で始め、「やめ」の合図ですぐやめること。
- 4 解答用紙が折れ曲がったり、破れたり、汚れたりした場合には、手をあげて監督者に申し出ること。

## II 解答記入上の注意

- 1 すべてマーク方式で解答を記入すること。
- 2 マークは必ずHBの黒鉛筆を使用して記入すること。ボールペン、万年筆、サインペン等を用いてはいけない。
- 3 答えは、すべて各問題の指示にしたがつて解答欄にマークすること。
- 4 一度マークしたものを訂正するときは、プラスチック消しゴムで完全に消してからマークしなおすこと。消して出たカスはきれいに払つておくこと。
- 5 次の場合には、いずれも誤答となるから特に注意すること。
  - (1) マークの仕方が悪かった場合。（特にマーク欄が塗りつぶされていなかつたり、外側に少しでもはみ出した場合）
  - (2) 問題が要求している以上に余分な答えをマークした場合。
  - (3) マークすべきところ以外に印をつけたり、汚したりした場合。特に枠内は絶対に汚さないこと。
  - (4) 訂正の場合の消し方が不十分な場合。

## III 氏名等の記入上の注意

- 1 問題用紙と解答用紙の両方の所定欄に、漢字で氏名を、算用数字で受験番号をそれぞれ記入すること。
- 2 解答用紙の左側にある受験番号をマークすること。

氏名		受験番号					
----	--	------	--	--	--	--	--



一 次の各問に答えなさい。

問一 次の文の傍線部の働きとして正しいものを選び、番号をマークしなさい。

満腹だが、餃子も食べたい。

- ① 主語 ② 述語 ③ 修飾語 ④ 接続語

問二 次の文の単語の数として正しいものを選び、番号をマークしなさい。

風が吹いてきた。

- ① 3 ② 4 ③ 5 ④ 6

問三 「暗夜行路」の作者を選び、番号をマークしなさい。

- ① 宮沢賢治 ② 志賀直哉  
③ 川端康成 ④ 森鷗外

問四 次の各文の「手」の意味が他と異なるものを選び、番号をマークしなさい。

- ① 手が足りない。  
② 行く手に火が見える。  
③ 猫の手も借りたいほど、忙しい。  
④ そこまでは手が回らない。

問五 次の敬語表現のうち謙譲語が使われているものを選び、番号をマークしなさい。

- ① これから練習を始めます。  
② チケットはお持ちでしようか。  
③ この椅子はご使用になれません。  
④ 父が先生のところ伺います。

問六 次の傍線部と類義語の関係にある熟語を選び、番号をマークしなさい。

授業の内容を聞いて克明にノートをとった。

- ① 懸命 ② 見事 ③ 丹念 ④ 素直

問七 次の漢字の送り仮名が正しくないものを選び、番号をマークしなさい。

- ① 貴い ② 裁つ ③ 専ら ④ 捨る

問八 漢字と部首の組み合わせが正しいものを選び、番号をマークしなさい。

- ① 商一儿 ② 清一青 ③ 垂一土 ④ 敬一十

問九 季語「卯の花」の季節を選び、番号をマークしなさい。

- ① 春 ② 夏 ③ 秋 ④ 冬

問十 次の和歌は、一日のいつ頃の情景をうたつたものかを選び、番号をマークしなさい。

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

- ① 夜明け ② 曜頃 ③ 夕暮れ ④ 深夜

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

学校は広い世界へと通じる通路です。さまざまな仕事に通じる通路でもあり、主権者として広い世界を自分たちで維持したり変革したりする活動をうまくやれるようになるための通路でもあり、人類が作り上げてきたさまざまな文化を享受するために基本的なことを身につけるための通路でもあります。

I、学校 자체は、ワクワクする体験をさせてくれるものに満ちた広い世界そのものではありません。あくまでも、<sup>(1)</sup>学校は、世界全体をある角度からコンパクトに縮約した文字や記号ばかりがあふれている場にすぎないのです。

II、先生の中には、上手に工夫した教え方で、この世界の真理や真実に目を開かせててくれて、驚きや感動に満ちた授業をしてくれる先生もいるかもしれません。でも、カリキュラムはギッヂギチだし、先生は忙しいし、何よりも教師からの思いが生徒の側に伝わることは限らないから、全国の学校のすべての授業が驚きと感動にあふれることは、とても期待できません。

だから、この学校という通路は、窮屈なほど狭く、退屈なほど殺風景な、長い廊下のような場所だと考えたらどうでしょうか。決して居心地がよい場所ではないけれど、でも、その廊下を通つて行けば、廊下の先には扉があって、その先は、身近な世界を越えた、さまざま生き方の可能性に満ちた、より広い <sup>(2)</sup>X につながっているのです。

長い廊下の先まで進んで、そこにある扉を開けたらどうなるかというと、たくさんの扉がある部屋に行き着きます。どの扉を開けて前に進むかは、あなた次第です。それが、人生の進む方向の選択です。ただし、「選抜」がなされる扉もあります。手をかけただけですぐに開く扉もありますが、簡単には開かない重い扉もあります。あなたが開けた扉の先には、ある世界がいきなり広がつていて、あなたを受け入れてくれることもあるし、あるいは、これまでとよく似た廊下だけの部屋になっていることもあります。いずれにせよ、あなたは前に進むことができます。

若い人たち一人ひとりが、それぞれどの扉を開いていくのかは、当人たちにとつては大問題です。「自分が何をやりたいのか」「自分に何ができるのか」、誰しも悩んだり迷つたりします。それどころか、「本当の自分はどういう自分なんだろ」と悩むことも多いと思います。中学生や高校生はもちろんのこと、大学生になつた若者の多くも、<sup>(2)</sup>そのような状況の中で生きています。自分がどう生きるべきなのか、簡単にはわからないから、そこで誰しも「自分探し」に悩まされることになります。ここでは、「自分探し」と学校との関係について

て論じます。

生徒たちや学生たちが「自分が何者か」を考えても答えが出ない理由の一端は、学校にもその責任があります。学校は、子どもたちを「まだ何ものでもない」状態に置くことによつて、アイデンティティを<sup>(4)</sup>宙吊りにする場だからです。

第一に、学校は子どもたちを「教育を受けることが必要な未熟な者」として扱います。教師—生徒という非<sup>(4)</sup>タイショウな関係がセットされている時点で、<sup>(5)</sup>原理的にそうなのです。「○○を理解しなさい」「××を覚えなさい」「△△について、レポートを書きなさい」といった課題をクリアしていくと、スタート時点とは別の状態、別の自分に達することが求められているのです。「ボクはもう、勉強しなくていいんだ。もう一人前だから」と言われたら、教育は成り立たなくなつてしまします。学校は、「勉強しなくちや、一人前の大人になれないよ」と脅しをかけながら、生徒や学生一人ひとりに対して、今の自分を未完成の状態だと位置づけさせるのです。

さらにいうと、学校は、子どもたちを現実の社会から隔離して、未熟・無能な状態を保とうとします。学校は、実際の社会で求められるような責任ある役割を生徒や学生に求めない代わりに、しばしば情報を遮断したり経験を制限したりして、勉強に専心させようと躍起になつたりもします。

III、学校という場では、子どもたちは未完成な存在と見なされ、現実の世界から隔離されて、アイデンティティの確立を先延ばしにされているのです。

ちょっと脱線しますが、高校生や大学生の中には、アルバイトとかで現実の社会の中での経験をする人は多いでしょう。お金を稼いで学費や生活費の足しにするといった点とは別に、いつまでも生徒や学生を未熟者扱いする学校に対して、別の形での成長の機会になるから、アルバイトをしてみることは悪いことではないと思います。責任ある役割を果たしたり、周囲の人や自分の失敗から学んだりして「一人前になる」ために有用だと思います。

しかし、大学の教員という私の立場からいふと、アルバイトをしていて自分に有能感を感じて、そこに「真の自分らしさ」を見つけ出す者がいたりすると、「困ったな」と思います。授業には出てこなくなるし、本も全然読んでくれないし……。アルバイト漬けになつてしまつて単位不足で面談に来る学生に対しては、私は「学生時代に勉強もせずにアルバイトばかりやつていたら、大学時代に勉強を通して身につけるべき大事なことが身につかないで、小銭を稼ぐだけの人生になっちゃうよ」と言うようにしています。本当にそななるかど

うかはわかりませんが、勉強に専心させるための脅しですね。

第二に、学校を卒業した後の選択次第、進路次第で、最終的なアイデンティティの具体的な中身は違ってきます。だから「私は何ものなのかな」が不確定になつてしまふというところがあります。社会の中でどういう役割を果たしていけるのか、まだわからないわけです。「教師として頑張りたい」と思つても教員採用試験に合格しなければ、別の道を考えるしかない。「技術者になりたい」と思つても、企業や研究所が採用してくれないと、なれない。

学校が提供するのは、せいぜい「仮のアイデンティティ」です。<sup>(7)</sup>「勉強がよくできてほめられる私」とか、「志望校入学に向けて頑張つている私」といったアイデンティティは、当面の学校生活を充実したものにしてくれます。「部活に打ち込んでいる私」とか「クラスの友だちに頼られている私」といったアイデンティティも、当面の〈自分探し〉の答えにはなります。しかし、これらはいずれも、学校を卒業した後まで続していくものではありません。

生徒や学生の中には、消費的な活動や学校の外での人間関係など、若者文化の中に、一時的なアイデンティティを求めることがあります。「好きな音楽を愉しんでいるのが本当の私」とか、「趣味にはまつてている私が本当の私」とか。新谷さんの論文に出てきた若者のよう<sup>(6)</sup>に、「地域の仲間とつるんでいるときの自分が本当の自分」というようなアイデンティティの探し方もあります。

アイデンティティの源泉としての若者文化という主題は、それ自体面白いものです。一つには、昔と比べてみて、現代の若者は、労働の世界に出て行く前に、何年間も若者文化の消費者、しかも一人前の消費者としてすごしているからです。また、学生時代の若者文化をそのまま自分の仕事にしたり、一生の生きがいにしたりする生き方も多く見られる時代になりました。とはいっても、大多数の子どもたちは今でも、自分が愉しんできた若者文化とは無関係に、自分の仕事や活動をどうするか考えないといけないときがやつてきます。若者文化にどっぷりはまつているままではいかなくなるのです。だからそちらも一時的な「仮のアイデンティティ」だということになります。

学校が子どもたちのアイデンティティを宙吊りにする結果、ある意味でとても皮肉な事態が生じてしまいます。学校を出た後に、自分が選択できるどの扉を選ぶのかは、本人次第だとされる。「何をやりたいのかは自分で決めなさい」ということです。でももう一方で、「私は何なのか。私には何ができるのか」という本質的な問いへの答えは先延ばしになつていて。学校という装置によつて子どもたちのアイデンティティは未確定なままにされてしまつていて。だから、その板挟みで、「自分が何をやつたらいいのかわからない」という事態が

生まれてしまうのです。

学校は「世界を縮約した知」だというお話をしましたが、その知は網羅的で、しかも概括的なものにすぎないから、そのまま何か特定のものについての関心や問題意識を与えてくれるわけではありません。ある教科のある事項にはまつて、そこから人生を選ぶことができるものいるかもしれないけれど、そんな幸運な人はあまり多くはないでしょう。

小学校から高校までの学習内容は、何かをしようと思ったときに、それに関わる材料を集めたり、それを理解したりするための基礎になるものだと考えたらよいと思います。どんな仕事でも、どんな活動でも、高校までの学習内容をきちんと理解しておいたら、それの一部が必ず基礎的な知識として役に立つのだと思います。

子どもたちの進路選択では、進路先について、あらかじめ十分に情報を提供して、理解させた上でどの扉を開くかを決めさせればいいじゃないか、という考え方もあります。「進路先選び」で進学先や就職先の情報をしつかりと伝えて考えさせる、というものです。確かにそれは必要だと思います。

しかし、このやり方には限界があります。進学先や就職先についての正確で詳細な情報があればあるほど、再び「自分は何をしたいのか」というところで、子どもたちはわからなくなってしまうだろうということです。たくさんの情報の中から自分は何を基準に優先順位をつけるのか。そのずらつと並んだ進路先のどれが自分に適しているのか。結局のところ自分は何をやりたいのか……。問いは振り出します。

家庭や友人から学ぶのは狭い。学校は「仮のアイデンティティ」は与えてくれるけれども、「自分がどう生きればよいのか」の答えは教えてくれない。進路先の情報を調べると、何でもやれそудだし、でも自分が何を選んだらよいのかは、膨大な情報が自動的に教えてくれるわけではない。<sup>⑩</sup>どうしたらいいのでしょうか。

私が中学生や高校生の皆さんにお薦めしたいのは、いや、大学生についても同じですが、「〈自分探し〉のためには、家庭・友人・学校のありふれた日常を超えた何か自分で探してみる」ということです。そのやり方はいろいろあるでしょう。

この本を手に取ってくれているような、読書好きの中学生・高校生の皆さんには、いろんな本を読んで、知的に背伸びをしてみることをお薦めします。本の世界は無限の広がりと奥行きを持つていますから、学校の図書館や地域の図書館、大きな本屋さんには、きっと自

分の関心をそそってくれる本があるはずです。自分で読書をしつかりやつていくと、親や友だちが知らないこと、学校では教えてくれないことを、いろいろストックできます。気がつくと、「ああ、こういうことをやってみたい」とか、「こういう生き方をしてみたい」と自分なりの生き方を考えることができるようになるでしょう。

もっとねらいを明確にして、普段の生活で疑問や興味を感じたことや、学校の授業で出てきたことで「面白そうだ」と思ったことを、自分でさらに調べてみる、といったこともいいですね。あるジャンルについて異常に詳しい小学生、「博士ちゃん」たちがテレビに出てきますが、あそこまで深入りしなくとも、何かにこだわって自分なりに学んだり深めたりしていけば、周りの誰も知らないことを知っている自分になります。うまくいけば、それが自分らしい人生の出発点になるはずです。

友だちを誘って、何か目新しいことをやつてみるというようなことも考えられます。私の友人は、高校時代に何人かで八ミリ映写機を使つて映画を作つたそうです。講演会やシンポジウムに参加してみるというのもいいでしよう。受付で「中学生ですけど……」とか言うと、きっと歓迎してくれます。

高校生や大学生は、自分で企画した旅行とかアルバイトとかが、自分の成長にとってのよい機会になるかもしれません。私の息子は、小学校六年生のとき、夜行列車で島根・岡山に一人旅に行きました。「今、駅の立ち食いそばを食べた」と松江の駅の公衆電話から電話してきました。ボランティア活動なんかも、家族や友人とは別の人間関係が広がつて、自分を見つめるよい機会になるかもしれません。いずれにせよ、〈自分探し〉のために大事なことは、「家庭・友人・学校のありふれた日常」に安住しないで何かをしてみる、ということがあります。

(広田照幸『学校はなぜ退屈でなぜ大切なのか』)

問一

① 学校は世界全体をある角度からコンパクトに縮約した文字や記号ばかりがあふれている場とあるが、この部分の説明として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 学校はさまざまな分野の知識を切り取って、再構成したものを教える場であるということ。
- ② 学校はこの世界の中にある真実や真理を、突きつめて教えていく場であるということ。
- ③ 学校は広い世界に通じている知識を、驚きや感動とともに教えてくれる場であるということ。
- ④ 学校は世界そのものを縮小したものであり、文字や記号はその手段にすぎないということ。

問二

I □ 、 II □ 、 III □ に当てはまる語として最も適切なものを次よりそれぞれ選び、番号をマークしなさい。

- ① しかし      ② しかも      ③ 例えば
- ④ もちろん      ⑤ あるいは      ⑥ だから

X □ に当てはまる語として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 変革      ② 文化      ③ 社会      ④ 真理

問四

② そのような状況にあるが、この状況とはどのようなものか説明したものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 自分が何者であるかがはつきりとわからないために、どの扉を開けるべきか全く考えられない状況。
- ② 自分の適性や生き方について悩み、迷つていく中で、開けるべき扉を選択していく状況。
- ③ 「自分探し」がうまくいかない中で、周囲に流されるままに開ける扉を決めている状況。
- ④ 自分が何者かという問いに答えが出せず、扉を開けられない責任を学校に押し付けている状況。

問五

③ アイデンティティの言葉の意味として適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 他者理解      ② 論理的思考力
- ③ 人間的成长      ④ 自己同一性

④ タイショウを漢字に直した時に適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 対象      ② 大正      ③ 対称      ④ 対照

## 問七

<sup>(5)</sup> 原理的にそうなのあるが、この部分の説明として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 学校に教師－生徒という協力関係が存在する以上、生徒は課題をクリアし、別の自分に達することが求められるということ。

- ② 学校に教師－生徒という支配関係が存在する以上、教師は生徒が未熟であるという先入観を持って接してしまっていうこと。

- ③ 学校に教師－生徒という上下関係が存在する以上、生徒は教育をうけなければならない未熟な存在と見なされるということ。

- ④ 学校に教師－生徒という利害関係が存在する以上、教師は未完成の状態である生徒を教育し、報酬を得ているとということ。

問八 <sup>(6)</sup> 「私は何ものなか」が不確定になつてしまつたるが、その理由として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 学校を卒業した後の選択次第では、資格や採用試験に合格することが必要になる場合があるから。

- ② 学校を卒業してやりたいことがあつても、それが社会に貢献できることであるかわらないから。

- ③ 学校を卒業した後の進路次第では、能力の不足で不本意な選択をせざるを得ない場合があるから。

- ④ 学校を卒業した後に進む道によつては、学校で学んだことを活かすことができない場合があるから。

## 問九

<sup>(7)</sup> 仮のアイデンティティとあるが、次に挙げる例の中で「仮のアイデンティティ」として適切でないものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 自発的に立候補した委員会の仕事に取り組み、日々頑張っている私。

- ② 部活動での経験を糧にして、スポーツ選手として努力する私。

- ③ 地域で行われているボランティア活動を卒業まで続けている私。

- ④ 漫画が好きで、読んだ漫画のレビューをSNSに投稿している私。

問十 <sup>(8)</sup> その板挟みとあるが、この部分の説明として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 学校は「世界を縮約した知」を学ぶことができる一方で、子どもたちが進路を決めるために役立つ知識や情報を与えてはくれないとということ。

- ② 学校が卒業後の進路選択を子どもたちにゆだねている一方で、子どもたちを未完成なものと決めつけて最終的な選択をさせずにいるということ。

- ③ 学校があらゆる場面で子どもたちの自由意思を尊重している一方で、自分のやりたいことを選択するための手助けを一切していないということ。

- ④ 学校は進路選択について自分で決めなければならないとしている一方で、子どもたちのアイデンティティの確立を先延ばしにしているということ。

問十一 このやり方には限界がありますとあるが、この部分の説明として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。<sup>(9)</sup>

- ① 十分な情報を提供した上で進路選択は、情報を取捨選択するための基準が子どもたちの中にならないためにうまくはいかないということ。
- ② 膨大な情報から進路を選択させるやり方は、「仮のアイデンティティ」しか持たない子どもたちには迷いを生むものでしかないということ。
- ③ 情報を提供、理解させた上で進路選択は、「自分は何をしたいのか」がわからない子どもたちにとつては全くの無意味であるということ。
- ④ 膨大な情報を与えた中での進路選択は、基礎的な知識のない子どもには選択の基準を問い合わせ続けるだけの結果になってしまふということ。

問十二 どうしたらしいのでしょうかとあるが、この問い合わせに対する筆者の回答を説明したものとして適切でないものを次より選び、番号をマークしなさい。<sup>(10)</sup>

- ① 読書を続けていく中で、身近な人からは得ることのできないことをストックしていくこと。
- ② 日々の生活の中での疑問を徹底的に調べ、その分野の専門家として人生を送っていくこと。
- ③ 興味のある分野の講演やシンポジウムに参加し、少し背伸びした知識に触れていくこと。
- ④ 自分で企画した旅行やボランティア活動に参加し、新しい関係の中で自分を見つめること。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「おばあちゃん、なかつたよ」

そのまま病院に直行して言うと、おばあちゃんはあからさまに落胆した顔をした。こちらが落ちこんでしまったくらいの落胆ぶりだった。「本のタイトルとか、書いた人の名前が、違ってるんじゃないかなって」

「違わないよ」Aとおばあちゃんは言つた。「あたしが間違えるはずがないだろ」

「だつたら、ないよ」

おばあちゃんは私の胸のあたりを見つめていたが、

「さがしかたが、甘いんだよ」すねたように言つた。「どうせ、一軒いってないつて言われてすごすご帰つてきたんだろ。店員も、あんたとおんなじような若い娘なんだろ。もつと知恵のある店員だつたらね、あちこち問い合わせて、根気よく調べてくれるはずなんだ」

そうしてBと横を向き、そのままいびきをかいて眠つてしまつた。

私はメモ書きを手にしたまま、パイプ椅子に座つて空を見た。季節は冬になろうとしていた。空から目線を引き下げるとい、バス通りと、バス通りを縁取る街路樹が見えた。木々の葉はみな落ちて、寒々しい枝が四方に広がつている。

すねて眠るおばあちゃんに視線を移す。私の知つているおばあちゃんより、ずいぶんisiaくなつてしまつた。それでも、もうすぐ死んでしまう人のようにはどうしても見えない。また、もうすぐ死んでしまうのだと思つても、不思議と私はこわくなかった。<sup>(1)</sup>きっと、それがどんなことなのか、まだ知らなかつたからだろう。今そこにいるだれかが、永遠にいなくなつてしまつということが、いつたいどんなことなのかな。

その日から私は病院にいく前に、書店めぐりをして歩いた。繁華街や、隣町や、電車を乗り継いで都心にまで出向いた。いろんな本屋があつた。雑然とした本屋、歴史小説の多い本屋、店員の親切な本屋、人のまつたく入つていらない本屋。しかしそのどこにも、おばあちゃんのさがす本はなかつた。

手ぶらで病院にいくと、おばあちゃんはきまつて落胆した顔をする。<sup>(2)</sup>何か意地悪をしているような気持ちになつてくる。

「あんたがその本を見つけてくれなけりや、死ぬに死ねないよ」

あるときおばあちゃんはそんなことを言った。

「死ぬなんて、そんなこと言わないのでよ、縁起でもない」

言いながら、Cとした。私がもしこの本を見つけださなければ、おばあちゃんは本当にもう少し生きるのではないか。というこ

とは、見つからないほうがいいのではないか。

「もしあんたが見つけだすより先にあたしが死んだら、化けて出てやるからね」

私の考えを読んだように、おばあちゃんは真顔で言つた。

「だつて本当にないんだよ。新宿にまでいったんだよ。いつたいいつの本なのよ」

④ 本が見つかることと、このまま見つけられないことと、どっちがいいんだろう。そう思いながら私は

「最近の本屋ってのは本当に困ったもんだよね。少し古くなるといい本だろうがなんだろうがすぐひっこめちまうんだから」

おばあちゃんがそこまで言いかけたとき、母親が病室に入ってきた。おばあちゃんは口をつぐむ。母はポインセチアの鉢を抱えていた。手にしていたそれを、テレビの上に飾り、おばあちゃんに笑いかける。母はあの日から泣いていない。

「もうすぐクリスマスだから、気分だけでもと思って」母はおばあちゃんをのぞきこんで言う。

「あんた、知らないのかい、病人に鉢なんか持つてくるもんじやないんだよ。鉢に根付くように、病人がベッドに寝付いちまう、だから縁起が悪いんだ。まったく、いい年してなんにも知らないんだから」

⑤ 母はうつむいて、ちらりと私を見た。

「クリスマスっぽくていいじゃん。クリスマスが終わつたら私が持つて帰るよ」

母をかばうように私は言つた。おばあちゃんの乱暴なもの言いに私は慣れているのに、もっと長く娘をやつてている母はなぜか慣れていないのだ。

案の定、その日の帰り、タクシーのなかで母は泣いた。またもや私は、ひ、と思う。

「あの人には昔からそななのよ。私のやることなすことすべてにけちをつける。よかれと思つてやつていることがいつも気にくわないの。私、

Dを尖とがらせた。

何をしたつてあの人にお礼を言われたことなんかないの」

タクシーのなかで泣く母は、クラスメイトの女の子みたいだった。母の泣き声を聞いていると、心がスポンジ状になつて濁つた水を吸い上げていくような気分になる。

あああ、と私は思つた。これからどうなるんだろう？ 本は見つかるのか？ おばあちゃんは死んじやうのか？ おかあさんとおばあちゃんは仲良くなるのか？ なんにもわからなかつた。だつて私は十四歳だつたのだ。

クリスマスを待たずして、おばあちゃんは個室に移された。点滴の数が増え、酸素マスクをはめられた。それでも私はまだ、おばあちゃんが死んでしまうなんて信じられないでいた。病室では笑つている母は、家に帰ると毎日のように泣いた。おばあちゃんが個室に移されたのは、私が鉢植えを持つていつたからだと言つて泣いた。

その年のクリスマスは冷え冷えとしていた。私が夏から楽しみにしていた母のローストチキンは黒こげで食べられたものではなかつたし、ケーキに至つては砂糖の量を間違えたのかまつたく甘くなかった。クリスマスプレゼントのことはみんな忘れているようで、私は何ももらえなかつた。

そうして例の本も、私は見つけられずにいた。

クリスマスプレゼントにできたらいいと思つて、私はさらに遠出をして本屋めぐりをしていたのだが、そのなかの一軒で、年老いた店主が、たぶん絶版になつていると教えてくれた。昭和のはじめに活躍した画家の書いた、エッセイだということも教えてくれた。それで、それまで入つたこともなかつた古本屋にも、足を踏み入れていたというのに。

黒こげチキンの次の日、冬休みに入つていた私は朝早くから病院にいった。見つけられなかつた本のかわりに、黒いくまぬいぐるみを持つていつた。

「おばあちゃん、ごめん、今古本屋さがしてる。かわりに、これ」

おばあちゃんはずいぶん瘦せてしまつた腕でプレゼントの包装をとき、酸素マスクを片手で外してずけずけと言う。  
「まったくあなたは子どもだね。ぬいぐるみなんかもらつたつてしようがないよ」

これにはさすがにかちんときて、個室なのをいいことに、私は怒鳴り散らした。

「おばあちゃん、わがまますぎるつ。ありがとうくらい言えないのつ。私だつて毎日毎日本屋歩いてるんだから。古本屋だつて、入りづらいのにがんばつて入つてるんだから。古本屋に私みたいな若い子なんかいないのに、それでも入つてつて、愛想の悪いおやじにメモ見せて、がんばつてさがしてるんだからつ。それにつ、おかあさんにポインセチアのお礼だつて言いなよつ」

おばあちゃんは目玉をぱちくりさせて私を見ていたが、突然笑い出した。<sup>(7)</sup>私の覚えているよりは数倍弱々しい笑いではあつたけれど、それでもすごくおかしそうに笑った。

「あんたも言うときは言うんだねえ。なんだかみんな、やけにやさしいんだもん、調子くるつてたの。美穂子なんかあたしが何か言うと目くじらたてて言い返してきたくせに、やけに素直になつちゃつて」

美穂子というのは私の母である。外した酸素マスクをあごにあてて、おばあちゃんは窓の外を見て、ちいさな声で言つた。

「あたし、もうそろそろいくんだよ。それはそれでいいんだ。これだけ生きられればもう充分。けど気にくはないのは、みんな、美穂子も菜穂子も沙知穂も、人がかわつたようにあたしにやさしくすること。<sup>(8)</sup>ねえ、いがみあつてたら最後まで人はいがみあつてたほうがいいんだ、許せないところがあつたら最後まで許すべきじゃないんだ、だつてそれがその人とその人の関係だろう。相手が死のうが何しようが、むかつくなことはむかつくなつて言つたほうがいいんだ」

おばあちゃんはそう言つて、酸素マスクを口にあてた。くまのぬいぐるみを、自分の隣に寝かせて、目を閉じた。くまと並んで眠るおばあちゃんは、<sup>(9)</sup>おさない子どもみたいに見えた。

(角田光代『さがしもの』)

問一

A  C  に当てはまる語として最も適切なもの

を次より選び、番号をマークしなさい。

- (1) ほつ (2) じろり (3) はつ  
 (4) ふい (5) やんわり (6) ぎらり  
 (7) ぴしゃり (8) につこり

問二 不思議と私はこわくなかった理由として最も適切なものを

次より選び、番号をマークしなさい。

- (1) おばあちゃんがもうすぐ死んでしまう人にはどうしても見えなかつたから。  
 (2) おばあちゃんも人間だから必ず死ぬことはわかっていたから。  
 (3) おばあちゃんが死ぬとしても、まだまだ先だと思つていたから。  
 (4) おばあちゃんが死ぬということ自体がよくわかっていないから。

問三

何か意地悪をしているような気持ちになつてくると思った時の私の心情を説明したものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- (1) 本をいつまでも見つけられない自分にわざと嫌がらせをしているのではないかと疑いたくなる気持ち。

- (2) 本を一生懸命探ししているのに、おばあちゃんの期待に応えられず申し訳なく思う気持ち。

- (3) 本を見つけられない自分に駄目な孫だとレッテルを貼られているような気持ち。

- (4) 本がないことはわかつていても関わらず探させていのではないかと不審に思う気持ち。

問四

縁起でもないの使い方として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- (1) お店の開店の日に雪が降るなんて縁起でもない。  
 (2) 春一番が冬の終わりを告げるなんて縁起でもない。  
 (3) 技術の発展によつて人類が進化するなんて縁起でもない。  
 (4) 敵対している隣国同士で戦争を始めるなんて縁起でもない。

問五

④ 本が見つかることと、このまま見つけられないことと、どちらがいいんだろうと思った時の私の心情として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 本が見つからない方がおばあちゃんにとつての幸せになるのであれば、見つかっても教えない方が良いのではないか。

- ② 本が見つかることと見つかることと見つかることと死にどうつながるのかわからない。

- ③ 本を見つけた時にはおばあちゃんが死んでしまうのであれば見つけない方が良いのではないのだろうか。  
④ 本が見つからなかつた時おばあちゃんが化けて出てくるのは怖いから、早く見つけて安心させてあげたい。

問六

D と同じ語が当てはまる慣用句として最も適切なもののを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① □□が泳ぐ  
② □□を利く  
③ □□が浮く  
④ □□を疑う

問七

⑤ 母はうつむいて、ちらりと私を見た時の母の心情を説明したものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 良かれと思つたことを否定されてどうして良いかわからず困惑する気持ち。

- ② 病気の親に何かできないかと思つてとつた行動を否定されて怒りでいっぱいの気持ち。

- ③ いつもの拍子で悪態をつかれて娘に何とかして欲しいと懇願する気持ち。  
④ 娘に対してとは思えない親の乱暴なもの言いに驚き、悲しさでいっぱいの気持ち。

問八

⑥ 心がスポンジ状になつて濁つた水を吸い上げていくような気分の説明として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 母の悲しみも含め何もかも受け止め自分が解決していくと前向きに捉えようとする気分。  
② 子どもの自分がなぜ母の悲しみを受け止めなくてはならないのかという納得のいかない気分。  
③ 母の悲しむ理由が自分にはよくわからなかつたが、同級生のように泣く母に同情する気分。  
④ 母の悲しみを戸惑いながらも受け止めようとするが、どうして良いかわからず困惑している気分。

問九

目玉をぱちくりさせて私を見ていたが、突然笑い出した時のおばあちゃんの心情として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 孫が急に怒鳴ったことに驚いたが、気を使わず素直に思つたことを言つてくれて嬉しかった。
- ② 孫が急に怒鳴ったことに驚いたが、自分が意地悪していいた理由にやっと気付いてもらえて嬉しかった。
- ③ 孫が急に怒鳴ったことに驚いたが、戸惑いながら本を探してくれている姿を想像したらおかしくなってしまった。
- ④ 孫が急に怒鳴ったことに驚いたが、素直に気持ちを打ち明けてくれたことで今後の皆とのやり取りが楽しみになつた。

問十

それがその人とその人の関係の説明として最も適切なもの

を次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 仲良くするところは仲良くし、意見が合わない時は譲り合うような関係。
- ② 相手の嫌いなところははつきりと指摘し、喧嘩を恐れず我慢しないような関係。
- ③ 意見の合わない時は議論を尽くし、最適解を目指すような信頼関係。
- ④ 自分の意思を明確にし、相手を攻撃してでも自分の意見を突き通すような関係。

問十一

おさない子どもみたいに見えた時の私の心情として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 愛着
- ② 滑稽
- ③ 同情
- ④ 愛情

問題は次頁に続く

四 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

今は昔、伯の母<sup>はく</sup>供養<sup>\*</sup>しけり。永縁<sup>やうえん</sup>僧正<sup>そうじやう</sup>を請じて、さまざまの物どもを奉る中に紫の薄様に包みたる物あり。あけて見れば、  
①  
朽ち<sup>※ながら</sup>にける長柄<sup>の</sup>橋<sup>の</sup>橋柱法<sup>の</sup>ためにも渡しつるかな

長柄の橋の切<sup>きれ</sup>なりけり。

またの日つとめて、若狭阿闍梨<sup>わかさのあじやり</sup>隆源<sup>りゅうげん</sup>といふ人、歌よみなるが來たり。「あはれ、この事を聞きたるよ」と僧正思す。<sup>④</sup>み懷<sup>みなづか</sup>より名簿<sup>名簿を引</sup>を引  
き出でて奉る。「この橋の切賜<sup>B</sup>らん」と申す。僧正、「かばかりの希有<sup>いかでか</sup>の物はいかでか」とて、「何にか取らせ給はん。口惜し<sup>A</sup>」とて帰  
りにけり。すきずきしくあはれなる事どもなり。

※仏供養……完成した仏像に魂を入れるための法要。開眼の供養。

※長柄の橋……淀川の支流の長柄川に弘仁三年に架けられた橋。朽ちはてて古いものの比喩に使われてきた歌枕。

※名簿……入門や服従の意思表示の証拠としてさしだす姓名などを記した名札。

(『宇治拾遺物語』)

問一 □惜し、あはれる事どもなりの現代語訳として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

問四 この事とあるが内容として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

A □惜し

① 不愉快だ

② 恥ずかしい

③ 残念だ

④ 畏れおおい

B あはれる事どもなり

① よくある話である

② 嘆かわしい話である

③ 情けない話である

④ 感心させられる話である

問二 朽ちにける長柄の橋の橋柱法のためにも渡しつるかなの和

歌に使われている表現技法として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 擬人法 ② 掛詞 ③ 対句 ④ 切れ字

問三 つとめてが示すものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 早朝 ② 昼間 ③ 夕方 ④ 真夜中

問五 ④ み懷より名簿を引き出でて奉るとは誰の行動か、該当する人物として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 伯 ② 伯の母 ③ 永縁僧正 ④ 隆源

問六 ⑤ いかでかとはここではどのような内容をいつているのか、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① どうしてこんなものが欲しいのですか。  
② 差し上げることはできません。  
③ ここでなくともどこにでもござりますよ。  
④ お譲りいたしましょう。

問七 本文の内容に合致しないものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

① 永縁僧正は伯の母から歌枕のゆかりの珍品を入手した。  
② 永縁僧正は「長柄の橋」を歌枕に見事な和歌を詠んだ。  
③ 隆源はあわよくば供養のための品を譲り受けようとした。  
④ 隆源は自分の要求を無理に通さずに帰った。